

戦場のピアニスト ロマン・ポランスキー

—原作とその背景—

安井廣之 クリニック院長

心を打つ映画を観ると、監督はどんな人物か、原作はあるか、脚本を書いた人は他にどんなものを書いているか、などと考える。

『戦場のピアニスト』はただごとでない映画である。表情も変えずに人が人を次々と殺し、そこには情のかけらもないかと思うと、深い家族の愛があり、淡い恋があり、命がけで助け合う人々がいる。死と隣りあわせの飢えがある。殺し合いがある。そして、画面には音楽が流れ、最後に人は信じ合えるものだというメッセージが暗示される。

ポランスキー、あなたは一体何者なのだとの思いが噴きあがってくる。

アメリカで未成年者淫行の罪が確定しており、入国すると身柄を拘束される。『テス』の主演女優ナスターシャ・キンスキーとは、彼女が一五歳のときから性的関係を持っていたとされる。それにしては、『テス』の冒頭で、「シヤロンに」と献辞を出すのに抵抗はなかったのか。二度目の結婚をしたシヤロン・テートは、妊娠八か月のときにカルト集団マンソ

ン一味に虐殺される。現在の妻は三人目で、フランス人エマニュエル・セニエ。子供が二人いる。

好色は間違いないだろうが、それは別として、彼の創る映画はひたむきだ。

最初の衝撃は、カトリーヌ・ドヌーヴ主演で撮った『反撥』だった。脚本はジェラルド・ブラッシュ。後にジャンジャック・アノーの『ラマン』の脚本を書いた人だ。これは観ていて震えが来るほど恐ろしい映画だ。統合失調症（精神分裂病）の病理を相当勉強しないと、これだけの映画は創れない。『ローズマリーの赤ちゃん』は、キリスト教の悪魔の概念が深層心理に染みついているといないとホラーを感じられないだろうが、『反撥』は壊れた精神の物語なので、日本の常識人でも怖さを感じるはずだ。

彼にはエンターテインメント風の面白い映画もある。レイモンド・チャンドラーを彷彿させる『チャイナタウン』がそれだ。また、自身の幼年期に重ね合わせ、ディケンズを丁寧に描いた『オリバー・ツイスト』も心を揺さぶる。しかし、『マクベス』のような駄作もある。もつとも、黒澤明版マクベスの『蜘蛛の巣城』も駄作だったから、シェイクスピアの映画化は容易でないということだ。マクベスは、原文を読ん

で場面を想像するのが一番面白いと、私は思う。

ポランスキーはパリで生まれたが、三歳のときに家族とともに父の故郷ポーランドに移住する。父はユダヤ人で、母もまたユダヤ系である。第二次世界大戦の勃発とともに、一家はクラクフのゲットーに閉じ込められる。その後母はアウシュビッツで殺され、父はマウトハウゼンの強制収容所に入れられる。彼自身は八歳でゲットーから脱走して田舎の農家にかくまわれ、その後秘密の援助組織の世話になったり、闇市で生活したりして生き延びる。

二〇歳のときアンジェイ・ワイダと知り合い、映画の道にはいることになる。

ポランスキーの顔写真を見たことがなかったので、インターネットで検索してみた。厭みのある卑猥な顔を想像していた私は拍子抜けした。どこかで見たことのある童顔なのだ。実際に会ったことはないのですが、TVのインタヴューか映画で見たに違いない。彼はワイダの『世代』に顔を出し、『吸血鬼』で監督主演し、『チャイナタウン』でチンピラやくざを演じてジャック・ニコルソンの鼻を切る。彼とは画面で何度も出会っていたのだ。

ウワデイスワフ・シュピルマンの手記

映画は実話に基づいている。原作者はポーランド国籍のユダヤ人ピアニスト、ウワデイスワフ・シュピルマン。ナチスドイツのワルシャワ占領を生き延び、その記録を「ある都市の死」というタイトルで一九四五年に出版した。

この手記はソ連の傀儡であるポーランド共産党政権により直ちに発禁処分を受け、日の目を見ることはなかった。ナチスドイツの暴虐を生き抜いた記録なのに、政権はその出版を許さなかったのだ。なぜなのかは、父親をソ連に殺されたワイダの作品『カティンの森』を観ると分かるだろう。手記の内容がソ連にとって不都合だったのだ。

ポーランド語の原作が闇に消えた後、五〇年以上経ってから英語版、仏語版等の翻訳が出版される。そのタイトルは英語版では「The Pianist」、仏語版では「Le Pianiste」である。いずれも定冠詞が付いたピアニストであるから、「例の」とか「あなたも知っている」とか「あの」ピアニストという意味がこめられている。

ちなみに、英語版のタイトルは「ザ・ピアニスト 一九三九〜四五年のワルシャワを生き延びた一人の男の驚くべき物語」となっている。日本語版は、この英語版からの重訳で

ある。春秋社から佐藤泰一氏の訳で二〇〇〇年に出版された。意味の取れない迷訳も散見されるが、大すじは理解できる。当初は「ザ・ピアノリスト」というタイトルであったが、後に『戦場のピアノリスト』と改題された。映画の影響であろう。シュピルマンの描写はきわめて客観的で、辛酸をなめていて自分自身をも客観視している。彼は苦境にある自分に対して同情を求めることを一切しない。淡々と自分と自分の置かれた状況を言葉で表現している。嘘も誇張もない正直な手記であることは、最初の数ページを読んだだけで、すぐに分かる。

一九四二年八月に家族の中でたった一人ガス室送りを免れた彼は、いつ選別されて殺されるかという恐怖を抱きながら強制労働に従事する。そして、四三年二月にゲットーから脱走する。その後は、ポーランド人の援助組織の世話になりながら、ワルシャワ市内で転々と隠れ場所をかえて生き延びる。見つければ、殺されるのだ。四四年八月には、ソ連軍の空爆や砲撃の音、蜂起したワルシャワ市民とドイツ軍との銃撃戦を垣間見ること、戦火が市内におよんでいることを知る。そのうちに、隠れている建物までドイツ軍に砲撃され、廃墟となった市内の建物を渡り歩いて命をつなぐ。ドイツ兵

による搜索やウクライナ兵の略奪もかろうじてやり過ごす。ソ連軍はヴィスワ川の対岸にまで来ているが進軍してこない。ワルシャワ蜂起の市民たちが社会主義革命を目指す人たちでなかつたので、ソ連はその人たちとドイツ軍の共倒れを期待して手を出さなかつたのだ。冷徹な戦略家であるスターリンは、ドイツ敗北後のポーランド占領を視野に入れていたということだ。手記の発禁措置の背景には、ソ連の政治的思惑が透けて見える。

やがてドイツ軍は撤退するが、その直前に、廃墟の中で、彼はドイツ軍大尉ホーゼンフェルトと遭遇する。シュピルマンは頼まれて、建物に残されていたピアノでショパンの遺作ノクターン嬰ハ短調を弾く。その後彼は大尉から秘密裡に食料の提供を受け、命をつなぐ。

映画『戦場のピアノリスト』

監督はロマン・ポランスキー、シナリオはロナルド・ハーウッド、主役はエイドリアン・ブロディ。三人ともユダヤ人だ。

映画が始まると、流れるのはショパンのノクターン嬰ハ短調。ブロディの演ずるシュピルマンの長くしなやかな指が鍵

盤を愛撫するように動く。その動きが音と完璧に一致しているので、彼が弾いているとしか思えない。しかし実際は、ポーランドのピアニスト、ヤーヌシュ・オレイニチャクの演奏である。シュピルマン自身の残した録音もあるが、映画では使われていない。彼は二〇〇〇年に亡くなったが、映像はYouTubeで見ることができ、演奏も聴くことができる。彼の演奏はまたソニーでCD化されている。嬰ハ短調のノクターンは、八〇年と四八年の二種類の録音が収録されている。後者はもちろん大変ひどい音だ。



映画の内容に興味を持った私は、シュピルマンの手記を何度も読み、さらにフランスの友人から、PAL方式で録画されたDVDを送ってもらった。これには、オリジナルの英語と仏語の吹き替え音声の両方が収録されていて、仏語の字幕も出る。そして付録DVDでは、ポランスキー、ハーウッドおよびブロディのインタヴューを観ることができる。嬉しいことに、この付録DVDには、PC用にPDFファイルでワルシャワ・ゲットの資料が付けられている。これらは貴重な情報源である。

前後して私は東京飯田橋の欧明社の在庫目録を調べ、L'AVANT-SCENE CINEMA の「Le Pianiste」特集を見つけた。これには仏語シナリオ全文とハーウッドのインタヴュー記事、それにゲットーについての説明等が掲載されている。映画は手記の内容を忠実に映像化しているが、ポランスキーは、自身の体験を重ね合わせて再現したと語っている。俳優の多くはセム族系のユダヤ顔をした人たちだ。

映画では、ドイツ兵が実に無造作に人を殺す。ユダヤ人家庭に押し入り、椅子から立てない老人を上階の窓から椅子ごと路上に放り出して殺すとか、親衛隊員がユダヤ人をずらりと腹這いに寝かせ、頭を拳銃で順番に撃ち抜いていくとか

は、手記の忠実な再現である。また手記には、ドイツ人警官が、彼に帽子を取って挨拶しなかったユダヤ人少年のこめかみを撃って殺し、表情も変えずに立ち去ったという記述があるが、これは映画には出てこない。出てはこないが、それに類似の残酷さは、この映画の全編で語られている。

なお、シュピルマンとドロータの淡い恋は、ポランスキーとハーウッドの創作である。原作でシュピルマンが恋のようなものをはめかすのは、ユダヤ人からの押収品の整理をさせられているときに、かすかな香水の香りに出会い、懐かしいある人思い出したというくだりくらいのものである。ハーウッドがこれを脚色したのであろう。また、映画の中でホーゼンフェルト大尉のために弾くのはバラード第一番ト短調作品二三だが、手記では前述したとおりノクターンである。

ハーウッドは南アフリカのケープタウン出身で、本名はホルウィッツ。ホロヴィッツとかアシケナージイという名はユダヤ人のもので、聞いただけでその出自が分かる。彼は一七歳でイギリスに渡り、演劇畑に進む。ナチスに協力したり、させられたりした人たちの状況に強い関心を示し、その人たちを主題にいくつかの作品を発表している。ポランスキーは彼の書いた「Talking Sides (味方する)」という芝居をパリ

で見て、彼にシュピルマンの原作を送った。それを彼は一気に読んだという。なお「Talking Sides」はベルリンフィルの指揮者フルトヴェングラーのナチス協力を連合軍が裁く過程を描いた戯曲だが、ハンガリーのイシュトヴァン・サボーによって映画化されている。これは日本ではまず手にはいらない。私はアマゾンに注文し、オランダから空輸してもらった。PAL方式で録画されており、言語は英語、日本語の字幕はない。余談だが、フルトヴェングラーの指揮するベートーヴェンの交響曲第九番と第三番に、私は何度涙したことか。だから私はどうしてもこの映画を観たかったのだ。ハーウッドはその後二〇〇五年にポランスキーのために『オリバー・ツイスト』のシナリオを書いている。二人は気心の知れた仲間になったようだ。

主役のブロディはショパンを弾けるようになるため、自らのアパートと車を捨て、ガールフレンドとも別れて数か月間引きこもり、ピアノの練習に専念したという。そのために体重が一五キロも減ったそうだ。また撮影中もピアノの練習を続けていた、と語っている。

この映画は実際にあつたユダヤ人絶滅計画の映像による再現でもある。これほど愚かで残酷なことが平然とおこなわ

れたからには、それなりの理由があったはずである。うねるような熱狂にドイツ人を駆り立てたものは一体何だったのか。

ヒトラーの政権取得とニュールンベルグ法

一九三三年に政権を取得したヒトラーは、三五年にニュールンベルグ法を制定する。この法律は「ドイツ人の血と純潔を守る」ことを目的とし、①ユダヤ人の公民権を剥奪する、②ユダヤ人がドイツ人と婚姻および性的関係を持つことを禁止する、を骨子としている。

ドイツ占領下のヨーロッパ各国においても同様の措置が講じられ、フランスは四〇年にユダヤ人排斥法を制定し、強制収容所送りに協力した。

ワルシャワ・ゲットー

一九三九年九月一日、ドイツはポーランドに侵攻し、第二次世界大戦が始まる。首都ワルシャワはその月のうちにドイツ軍の占領下に置かれる。

当時はユダヤ人居住区域にチフスが流行していたこともあって、翌四〇年に、ドイツ軍はこの区域を高さ三メートル

の壁で囲み、ユダヤ人が外に出ることを禁止する。なお、この壁はユダヤ人の負担で、かつユダヤ人の手によって造られた。

これがゲットーである。四百ヘクタール（四平方キロ）の囲みの中に、最多時には五〇万人が詰め込まれた。ワルシャワ・ゲットーはナチスドイツが創ったゲットーの中で最大のものである。北側は貧しい人たちが多く住む大ゲットー、南側は知識階級・中産階級の住む小ゲットーで、両者は道路を挟んで歩道橋で結ばれていた。ゲットーの外は「アリア地区」と呼ばれた。

ユダヤ人は右腕にダビデの星の腕章を付けさせられ、①所有する資産の申告、②商店および工場の接収、③銀行口座の凍結、④ユダヤ人学校の禁止、⑤ゲットーからの外出禁止、違反は死刑、⑥ドイツ人とすれちがう際には頭を下げ、道をあける、⑦郵便物の発送と受け取りの禁止、等を強いられた。ゲットー内は食糧不足と不衛生に悩まされ、そのために疫病が蔓延して、二年間で八万人が命を落とした。

四二年になると、ナチスは「究極の解決法」を打ちだし、ユダヤ人絶滅計画を実行する。

大ゲットーの北側にはウムシュラークプラッツ（鉄道の荷

物積み替え場）があり、ゲットーの住民はそこから家畜用車輻でトレブリンカの絶滅収容所に移送され、ガス室で殺された。その数は三〇万人にのぼる。移送される人たちを選び連行するのはユダヤ人警察官の仕事であった。四二年の八月時点でゲットーに残ったのはたった数万人といわれる。

ちょうどこの年の八月五日ごろ、シュピルマンは、子供たちと共にガス室に送られる小児科医コルチャック先生とゲンシア通りですれちがったと、その手記に心をこめて記録している。

この年の夏から秋にかけて、ゲットー内でユダヤ人の戦闘組織が蜂起する。

内部の治安はユダヤ人ゲットー警察が担っていた。二千人の警察官が強い権限を持ち、賄賂を取ったり、ドイツ側について他のユダヤ人を力づくで抑えつけたりしていたため、戦闘組織は彼らを次々と殺害した。

蜂起に対し、親衛隊全国指導者ハインリヒ・ヒムラーはワルシャワ・ゲットーの完全破壊を命令する。親衛隊とドイツ警察は、装甲車、航空機、機銃装備の歩兵、手榴弾、火炎放射器、毒ガス等で攻撃し、四三年五月には戦闘組織を壊滅させ、ゲットーを完全な廢墟にしてしまう。

四四年八月にはワルシャワ国内軍とレジスタンスが蜂起するが、装備が貧弱であったことと、上に見たようにソ連軍が傍観するのみで進出してこなかったために、ほどなくドイツ軍に鎮圧される。

四五年一月一五日、ドイツ軍は撤退し、ワルシャワは解放される。

市内で生き残ったユダヤ人は二百人といわれる。

なお、完全に破壊されてしまったワルシャワはその後徐々に再建され、市内には蜂起を記念するモニュメントがあるという。それを教えてくれたのは、本誌の編集責任者林久登氏である。氏は一九七九年に技術指導員としてポーランドのプオーツクに一年間赴任し、「愛すべき、かかあ天下の国ポーランド」という滞在記を著わした。氏は休日を利用して同国各地を旅行し、並外れた観察眼と好奇心で当時のポーランドを活写している。

敗戦の近いことを知ったドイツ軍は、トレブリンカの絶滅収容所の証拠隠滅を図る。建物を完全に破壊して、そこを埋め立て、植林し、どこに収容所があったのかさえ分からなくして撤退する。現在はおおよその場所が突きとめられ、徐々に

に発掘作業がおこなわれているとのことだ。

なぜ殺すのか

ナチスドイツはユダヤ人を地上から抹殺する計画を立て、実行に移した。その結果、六百万もの人たちが殺された。この計画に賛同し、協力し、実行する多数の人たちがいなければ、これだけの犯罪は成立しない。

ひるがえって日本は、朝鮮半島から中国大陸に進出し、多くの人たちを殺し、支配した。過日、私は旧満州のハルピンを訪れ、郊外にある日本軍七三一石井部隊の施設跡地を見て回った。目を覆いたくなるような人体実験の証拠が並べられていた。

現在は、ドイツでも日本でも、街で殺意をむき出しにしている人に出会うことはない。しかしながら、私たちの先代、先々代はユダヤ人、朝鮮人、中国人を虐殺したのだ。最近では、ISがそれをおこなっている。

現代の私たちはそんなことをするわけがないと、私たち自身は思っている。しかし、戦時に虐殺を実行した人たちが狂っていたわけではない。私たちと同じ普通の人たちが、それをやったのだ。

狂気は私たちの中にある。

多くの人たちが同じ狂気に染まり、一つの方向に向かって進んだとき、私たちは自分が唯一の正義をおこなっていると信じ込みやすい。

映画『戦場のピアニスト』はそのことの警告でもあるといえるだろう。

